

手関節駆動式把持副子の追跡調査

(Follow-Up Study of Wrist-Driven Flexor-Hinge-Splint Use)

Virginia R. Allen, O.T.R.: The American Journal of
Occupational Therapy, 25(8), 420-422, 1971

Highland View Hospital で 1959~1969 年の間に Wrist-Driven Flexor-Hinge-Splint を処方された者の follow-up study において、43% の使用続行が解答された。C₅ level には外力による Flexor-Hinge-Splint が試され、C₇ level には最少限の adapted-device により selfcare の独立を図ることから C₆ level のみが対象となった。42 名中 18 名 (34%) が使用を続行しており、中止した 24 名中 18 名は機能向上のためである。35 名が着脱に独立しているが、装着に時間を要することが splint を長時間うまく使いこなせるにもかかわらず、その有用性を少なくしている。他人の援助の方が時間をかけるよりも容易であろう。多くが ADL に使用している。特にどの activity に必要かといえ、26 の異なった activity に必要で、13 の activity に妨げになるという解答があった。Feeding, Writing, Typing, 強いピンチに有効、反面、Feeding, W/C pushing に妨害など ADL に関しては個々の症例により効果に変化があ

る。splint は Feeding, Buttonning, grooming, communication skill として使用されている。lower-extremity butthing, dressing, driving a car という activity は低下しており、これらは今後の課題であろう。又、splint の受け入れはその使用能力と activity を成しとげるに必要な個人の need に直接結びついている

Wrist-Driven Flexor-Hinge Splint は、C₆ の quadriplegic に prehension を与えるだけでなく、tenodesis pattern の促進のための training device として、wrist extension muscle の強化として、また、患者の natural tenodesis action が機能的に十分強くなるまでの一時的な prehension の補助となるものである。Wrist-Driven Flexor-Hinge-Splint は多くの C₆ quadriplegic に広く種々の ADL をなす可能性を与える。C₆ level の現在の selfcare 独立というゴールは確かに根拠のあるものと思われる。

(岡山労災病院, 作業療法士 毛利 由紀)

リハビリテーションのモチベーションに及ぼす脳損傷の影響

(Effect of Cerebral Damage on Motivation in Rehabilitation)

Ira Belmont, Ph.D. Hermina Benjamin, M.D., John Ambrose, B.S.
and Robert D. Restuccia, B.A.: Archives of Physical
Medicine and Rehabilitation, 50(9), 507-511, 1969

身体障害者のリハビリテーションが成功するか否かは、一部には患者が自分の治療や訓練計画に参加するかどうかにかかっていることは周知の通りである。

著者は年令、性、社会階層などの点で類似している脳損傷のある半身不随患者と脳損傷のない障害者(脊損、末梢神経麻痺、筋疾患、骨折、切断など)の2つのグループについて、訓練室に治療者がいる場合とない場合

に、2つのグループの間で目的を達成するための motivation の点でどのような差異が生じたかを組織的に観察した。

その実験集団は脳損傷のある半身不随患者 15 名(左 13 名、右 2 名、平均年令 57.5 歳)であり、対照とした集団は脳損傷のない障害者 13 名(平均年令 56.7 歳)であった。

この研究で得られたデータは、グループ全体および個人の行動について分析している。全体の分析からは次のような事が指摘された。治療者がいた場合には、実験集団も対照集団も、訓練に関係ある行動に大部分の時間を費した。（各々平均 82.2% と 90.5%）治療者が不在の場合、訓練に関係のある行動に使われた時間が対照集団では 86.6%（-3.9%）であったが、実験集団では 54.4%（-27.8%）で大きな統計上の偏位がみられた。個々の患者についてもグループ全体の分析と同様の傾向がみられている。すなわち対照集団では 13 名中 10 名

（77%）が治療者がいる時と同じかそれ以上の時間を使い、残りの 3 名が非活動的であった。これに対して実験集団では、15 名中僅か 4 名（27%）が治療者がいる時と同じかそれ以上で、残りの 11 名が非活動的であった。

以上の見解は、脳損傷のある半身不随患者が、しばしば神経機能の柔軟性の減弱をもたらし、行動面においても、依存傾向の強いことを示唆している。

脳損傷患者の治療に際しては、特に *motivation* が重要であることを再認識した。

（香川労災病院，作業療法士 磯崎 彩美）